

名の人を指揮し、戦時中の悪条件の下で FK 3 星系の三鷹子午線経過時の視位置の推算に専念し、しばしば徹夜をして推算の完成に力を注いでいた。福見先生が 21 年 3 月に退官されてからは中野三郎氏及び私と同君の 3 人で暦象年表の編成に関する一切の業務並びに理科年表暦部の計算を分担した。当時は外国の天体暦を入手することが出来ないため暦象関係の諸現象の計算を完成するには並大抵の苦勞では済されなかった。如何にして発表期日までに正確な結果を求めるかについては、しばしば激論を戦わしたもので、今となっては懐しい思い出である。昭和 26 年度から暦象年表の編成に関する一切の業務及び理科年表暦部の編成を担当し、これらの改良と正確な暦書の編成に一意力を注いでいた。その後、編暦と関連して暦法の研究を始め、昭和 31 年末頃に東京史料編纂所の桃教授と共同で本邦宣明暦行用時代の暦日の研究に着手し、昨年末までに貞観四年(826)年より貞享元年(1684)年までの 823 年間の廿四節氣、日没及び驚蟄が経朔に含まれる定期の計算を完了している。又暦法研究の便に供する目的で昭和 32 年より本邦古暦史料の蒐集をはじめ、日本の各地に古天文書の探訪を行って、昨年末までに、資料を収めたカード及びフィルムコマは数にして併せて 23,000 枚に達している。更に科学史の研究にも着手し昭和 37 年度より江戸時代の天文学という総合研究の課題分担者となって江戸時代の天文学者の業績を中心とする研究を始めた。同君は上述のように科学

史関係の諸研究に意欲をもやし、それ等の完成を目指して今年も既定の計画に従って着々と研究を進めていたのである。

旅行先で同君が発病し倒れ、入院したとの報に接したのは 8 月 9 日の 9 時頃であった。その病名は脳卒中とのこと——成程 8 月 3 日に同君が古暦史料の探訪及び科学史関係の研究連絡会に出席する為に富山県新湊町に向けて出発している。その帰路での発病だなど思ってはみたが——平生同君自身が低血圧であるといっていたため、脳卒中で倒れたとは到底私には考えられないことであった。多分人違いではないかとそんなに気に懸けなかったのである。しかし取敢えず家族の方及び台長にこの事を伝えはしたものの、如何にしても信ぜられないことなので長距離電話で病院に問い合わせさせ、色々と尋ねた結果同君に相違ない、その上わるいことには仲々の重態であることが判明し、直ちに台長にこの旨を伝え適宜の処置をして頂いたのである。しかし、その後の容態が気懸なため、13 時頃再び病院に容態を問い合わせた結果、12 時 35 分に亡くなられたとの凶報に接し余りのことに愕然とした。長年に亘り蒐集した研究資料を同君が着実に整理し、一步一步と研究の完成に向けて努力していたこの数年間の様子を思い浮べるとき、同君の急逝は誠に惜みても余りあることで、諸行無常の感を今更ながら深くせざるを得ない。(昭和 38 年 9 月末)

## 北海道日食観測記

### 辻村民之\*

7 月 21 日早暁、快晴の北海道知床半島・羅臼平(標高約 1400 米)にあって、京都大学生駒山太陽観測所日食観測隊は、東空低く遙かソ領国後島チャチャ岳の左上方に太陽コロナの撮影に成功した。

生駒山太陽観測所で今度の皆既日食を観測しようと計画したのは今年に入ってからである。従って日食委員会の計画に発表されず、観測費の調達に苦慮し、やっと旅費だけは何とかなって観測行を決定したのは、日食にあと二ヶ月、勿論観測機器の準備や観測地の状況調べは事前より進めていた。

観測行には堀井政三講師と小生のスワロフ・メンバーに今秋ペルー・ワンカイヨに行く予定の野村常雄君が初めての皆既日食を見て、未知の北海道を旅してのち南米に渡りたいとの希望から同行協力することになった。

観測はコロナ流線の撮影を目的とし 1.5 米焦点(F20)

の関西光学製カセグレン式鏡筒にトヨ・ビューカメラのピント部分を装置し、4×5 判パック・フィルム(ASA 100)に短時間露出によって内部コロナをねらい、一方望遠レンズ(コムラー 500 mm, F7)を用い 35 mm フィルムに外部コロナを撮ることにした。

観測地の選定には霧のもっとも多い 7 月の北海道ではあるが、早朝の霧は生駒山における経験では雲海として低く沈んでいるところから、高い山に登れば晴天である限り霧の心配は少ないであろうし、又日の出直後の低い太陽高度の点にも少しでも利するとあって、知床半島の羅臼岳近辺と始めから考え、登山の難易、キャンプの適否等について現地羅臼町役場等に問合せたりして準備を進めた。

7 月 17 日、目的地羅臼町に到着した。現地調査をしていない我々にとって、羅臼岳に登山する前に一応の準備を整えたり、計画の進行上、町営羅臼荘をいわば本拠地とした。ここは羅臼町より更にバスで約 10 分、羅臼

\* 京大生駒山太陽観測所

温泉に知床観光ホテルとならんでいる。羅臼岳登山口はつい近くではあるが、目ざす羅臼岳は霧雨に包まれ、そ場の姿をうかがい知る事も出来ない。

到着後まもなく、町役場より教育長が日食観測地について参考意見を説明に来て下さって「この霧雨は数日来的もので7月の羅臼附近はこうした天候がつづき、予定の羅臼岳も霧であろう、従って観測には知床岬の方が海流の関係上天候に恵まれる事が多く成功率が高いだろう。ただ岬には船便しかないが、未だに雪渓の大きい羅臼岳登山の事も考えれば岬行をすすめる」とのことで計画の迷いがこの霧の中の旅荘の一夜の考えごとともなり、なかば岬に行くことさえも決めた位である。

しかしながら、翌18日にはこの憂慮も吹きとんだ。宿の前を羅臼岳よりの下山者が通りかかる。それ等の人々は「羅臼岳山頂は晴天ですよ。1000米位まで下って来ますとガスに包まれ、この悪天候でおどろきました」との快報を伝えてくれる。同夜おそく、協力同行の京大宇宙物理学学生、京都学芸大生、生駒山天文協会のメンバーが到着、早速観測について説明会を開き、羅臼岳の天候を信じるも一応明日知床岬への状況調査と、羅臼岳登山の難易と状況の調査をしようと決めた。

19日、午前5時の観光船で岬に行った野村君は昼過ぎ帰って来て、やはり雲低い状態であることを報せる。午前7時半頃、丁度一緒になった札幌天文同好会の一団と羅臼岳登山に向った堀井講師等は、数名を羅臼平に残してやや予定より遅れ、夕方6時過ぎ、くたくたに疲れながら快晴の羅臼岳の朗報をもって元気に帰着、想像以上の雪渓の状況、けわしい登山道ではあるが天候はすでに観測成功を約束するとの報告があって、愈々明日の本行動には最少限の器材、必需品だけを携行することを申合わせた。

20日、やはり霧の羅臼荘ではあるが身仕度をする心はずみ、午前7時過ぎ宿の人々の成功を祈りますの声に送られ出発、先導は昨夜好意的な応援を申し出て下さった千葉大商ワンダーフォーゲル部のメンバーであったことは、心配したこの登山行を比較的に楽にして頂け、やはり登山経験者のペースの上手さに感心したものである。急坂をのぼり、石ころに気を付け乍ら約3時間程登ったところに硫黄臭の強い溪流が岩を砕いて流れ、このあたりから霧は晴れ、樹木も通り過ぎ、眼前には羅臼岳が見える。やがて雪渓につく、傾斜角度は60度を越すかと思える位であり、一步一步雪を踏みしめて歩く。アイゼンを履かない登山靴だけに支えられた体には、望遠鏡をにない、リュックを背負い、テントをおっている。足を滑らしたらと思うだけでも恐ろしさがつづく急坂の雪渓約2軒に、たっぷりと時間をかけて登りつけば、そこは可憐な高山植物の咲き乱れるお花畑が待って

いた。ここから更に15分程這松原を通り、小雪溪を渡れば羅臼平であって、南に羅臼岳北に三ツ峰をひかえる広い平坦な鞍部となっている。既に多くの天文グループのテントがたちならび、明朝への準備に張りつめた空気を感じさせる。

観測点はこのキャンプ地より羅臼岳の方に少し登った這松原の中に設け、機器の組立、調整は登山の疲れも忘れたようにはかどる。

高山での星空は美しい。しかしそれを眺めていてはならない。ゆっくりと寝て明朝早い起床にそなえ、充分な休みをとって貴重な瞬間に対する緊張にあたらなければならない。いくばくか眠ったであろうか、小さなテントでの雑魚寝。周囲は次第にさわがしく、もう少しと思う眠りを与えてくれない。

21日、午前2時半、寒さにふるえながらも観測準備にかかる。空は一面の星がまたたき、その星あかりの道を観測点にいそぐ。薄明の東空は相変らずの雲海がはてしなく、国後の山々の頂きが見える。金星ののぼるのを見て、日の出点を確認しレンズを向ける。ラジオが各地の実況を伝え始める。何所かいくらかの薄雲が心配らしい。しかし快晴の羅臼平はその懸念さえもない。準備完了、あとは日の出を待つのみ。

冷たい、何か気味悪ささえ感じる風がひとしきり、東空低く赤い太陽はその姿を次第に細くしてくる。そして思いのほか高度も高く感じられ、青空の中に眩ゆさをましてくる。

ピント面に太陽像を追う。あと何秒間後かの緊張。分秒報時の音さえも耳に入らない。

誰かがコロナだといったようだ。おーっというざわめきか、歓声か、うめきのようにさえ聞こえたようだ。夢中でシャッターを切る。撮れたのだコロナが！ その時間は余りにも短かった。20秒足らず、いや10秒もない瞬間の出来事のように過ぎ去ったコロナ。あとには虚脱したような皆の姿。言葉が出ない。手がふるえているようだ。しばしの後、どこかの観測隊が万才三唱をするのを聞きやっとなりに帰える。太陽は眩しく輝いている。

なお我々と行動を共にした関西医大教養部古田清正助教授は日本光学の天体望遠鏡(口径7.5mm, F12)にモーター・ドライブのニコンFを取付け皆既直前より直後までを連続撮影し、望遠レンズ(ニコン350mm, F4.5)によってカラー・フィルムによるコロナ撮影を行って成功した。帰所後、出来上がったカラーのコロナは美しく、機器に釘付けで肉眼では見なかったコロナをゆっくりと充分に見せて頂けたことを附記する。

最後に、到底三人では遂行出来なかったであろう観測行に活躍してくれた京大、京学大、千葉大商の学生諸君に深く感謝の意を表したい。